

「国家の輪郭と越境」研究会
第3回：『Mother India』を読む 第3部 (pp. 145-217)
2009年5月26日(火)
担当：豊山 亜希

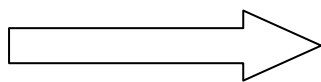
■ 幕間「バラモン」：pp. 145-149

- ◆ マドラス：バラモンが力をもつヒンドゥーの本拠地。また古代の人々、すなわち黒い肌色をしたドラヴィタ人の子孫の本拠地
- ◆ この地のヒンドゥーはドラヴィダ人を抑圧（パリア、賤民、無知、貧困であることを強要）
- ◆ イギリス人の到来が平和、秩序、民主主義をもたらしたことで、ドラヴィダ人は生き永らえた。反バラモン勢力となり、バラモンからマドラス管区立法府の主導権を奪い取るほどの勢力に発展

◆ マドラス市内の会合で聞いた、低位カースト出身の政治家によるバラモン像

- バラモンは古来、学問に専念する者に過ぎなかった。その後、生来の狡猾さから聖典の支配権を主張し、バラモンは全人の支配者である、との偽の文言をそこに密かに書き込んだ。人々はバラモンを地上の神と信じるようになった。イギリス人が全人のための学校を携えてインドに来るまで、誰もバラモンと争おうとはしなかった。
- マドラス管区においてバラモンの力は未だ強い。出版社、法廷への影響力、公職の80%を掌握、人々、とりわけ女性に対する抑圧。民衆が迷信深く、大多数が文盲であることに起因。
- バラモンは、彼らに低位カースト抑圧をさせないイギリス人を憎悪し、「愛国的な」叫びを上げる。低位カーストの立場が安定する前にイギリス人が去ったら、インドはかつての姿（＝太ったバラモンに大多数の隷民が支配される残酷な圧制）に戻ってしまうだろう。
- インドのヒンドゥーは、生まれたときから死にいたるまで、国よりバラモンに金銭を渡す機会のほうが多い。

子供の誕生、生後16日目の「生の穢れ」のお清め、子供への名付け、生後3ヶ月の剃髪、生後6ヶ月のお食い初め、子が歩き始めたとき、満1歳の祝宴、満7歳（男子）の学校入学、女子の満1歳、満7歳、満9歳、男子の1歳半、2歳、あるいは16歳までの何歳でも婚約式が執行された場合、思春期かそれより早い結婚の完成、日月食、葬儀、法事…



これらは全てバラモンの「既得権」
150万のバラモンを4100万人以上の低位カーストが養っている

- これが、低位カーストがバラモン（＝低位カーストに触れると穢れると言いながら食べ物にする150万もの主人）よりも、イギリス（＝海の向こうの離れた王）を好む理由である。イギリス人は、低位カーストに平和、正義、金銭的援助、自由になる機会を与えてくれる。

■ 第11章「人間以下」：pp. 150-163

- ◆ 「神秘的なインド」の言うところの「神秘」
→ 具体的な事象に対して、神秘的な要因の探求に固執している限りにおいて存在する。実際的な要因を求めると、そうした神秘は煙と化す
- ◆ ヒンドゥーの政治家によるイギリス批判：
「なぜ長年のイギリス統治にもかかわらず、我々の92パーセントは未だ文盲なのだろうか？」

- 英領インドの人口 247,000,000 人のうち 25% (60,000,000 人) は太古より文盲で、兄弟たちより劣ると罵倒されてきたことには触れられない。この 60,000,000 人の基本的権利を否定しながら、「人種の偏見」をもつ個人、社会、国家を糾弾するヒンドゥーの能力こそが、インドの神秘である。
- ◆ カースト制度の起源と成立
 - 土着の民族であるドラヴィダ人＝不浄な者、「不可触民」
 - 『バーガヴァタ・プラーナ』の引用：

「その罪（バラモンを殺した罪）を負った者は誰しも、その死にあたり不浄な者に食べられる虫の一類型に生まれ変わるよう判決が下される。長い年月ののちパリア（不可触民）に生まれ変わり、牛一頭分の体毛の本数の 4 倍の年月を超えて盲目となる。この者はそれでも、4 万人のバラモンを給餌することで罪を贖うことができる。」

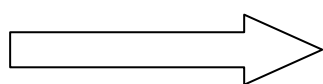
「バラモンがシュードラを殺した場合、100 回ガヤートリ（祈り）を唱えれば罪は償われる」
- ◆ 現代における、正統派ヒンドゥーの不可触民に対する規定
 - 人間より劣るかのようにみなされる、最下層の職業の確保、教育の機会の否定、種々の施設（ヒンドゥー寺院、公共井戸、法廷、施療院、宿屋、公道…）の使用禁止など
 - 就業機会すら与えられない物乞い、人が消費する食物を穢す者、身体から臭気として「隔てられた穢れ」を発散する者
 - 不可触民の特定の集団は犯罪稼業（スリ、夜盗、偽造、高速道路での窃盗、殺人などの得意分野がある）を発展させてきた。しばしば、その得意分野と副産物としての売春を合併させている。「犯罪部族（Criminal Tribes）」と呼ばれるこれらの人々は、現在インド全土に 4,500,000 人程度
- ◆ 不可触民の問題は、ヒンドゥー教の内に縦横に編みこまれている
 - Surendranath Banerjea :

「…神の裁定が社会機構の助けにおいて引き合いに出される場合、…その源は、理性より情感に求められる」
- ◆ 人々はカーストが脅かされたり、神が侮辱されたりしている、という囁きにすぐ扇動されることを、イギリス政府は最初から分かっていた
 - ヴィクトリア女王の声明（1858 年 12 月 2 日）：

「…我が名のもとに権威を与えられたいかなる者であろうと、臣民の宗教的信仰や信心に干渉しない…」
 - 英国東インド会社総督（1854 年）：

「いかなる男子もカーストに基づいて公立校や大学への入学希望を拒絶されない」
- ◆ 市民法による不可触民の地位向上：教育上の優遇策、公職の確保。これらに関連した土地開発や共同事業が、新たな職位と逃げ道を提供
 - マドラス政府の公式見解（1919 年 3 月 17 日）：

「法規は、あらゆる男子はカーストで入学希望を拒絶されないと謳っているが、パンチャマ（不可触民）の子は管区内 8,157 校のうち 609 校においてのみ受入れられている」



顕著な進歩
アウトカーストを拒絶する学校数は受入校の 12 倍に過ぎない

- ◆ 1926 年 8 月某日のボンベイ立法府における、不可触民に関する議論
 - 不可触民の基本的権利の保障を、地方議会にも許可させる
 - あるヒンドゥー議員：

「・・・そこ（決議）に与えられた効力というのは、大きな不幸をもたらす効力です」

- 別のヒンドゥー議員：

「・・・彼ら（イギリス人）はおそらく外国からやって来たがために、様々な社会集団の宗教に手を加えて非難されることを恐れてきた・・・」
- Mr. Noor Mahomed（シンド地方のムスリム）：

「・・・ヒンドゥー社会には、イスラームやキリスト教が、生来の宗教を変えるために、抑圧された階級の構成員を誘導しているなどと不満を述べる道理はどこにもない。・・・他の土地からやってくる人々を非難する前に、我々自身がしてきた民へのふるまいがどうであったか理解すべきだ。人間の基本的権利を（我々自身が）否定してどうして、より大きな政治的権限を求めることができようか・・・」
- ◆ 法規の実効力：アウトカーストを学校の扉へ連れて行くことはできるが、敷居をまたがせる勇気を付与することはできない
 - 村の教育委員：

「カーストに属する者はアウトカーストの啓蒙に何もしないだけでなく、その道程にあからさまな障害物を置く・・・なぜならもし彼が啓蒙されれば、彼はもはや搾取されなくなることを知っているからである・・・もしアウトカーストが教育だけでなくキリスト教の教えをも望めば、迫害はしばらく激しさを増すだろう。なぜなら、カーストに属する者はもしアウトカーストがキリスト教徒になれば彼らはもはや卑しい奉仕をしなくなるだろうと恐れているから」
- ◆ 「抑圧された階層」による、権利拡大の動向
- ◆ アウトカーストの女性（＝キリスト教への改宗者）：教師、看護師の主要層。上位カーストによって軽蔑・拒絶されてきた職業であるが、職能によって社会的影響を拡大する可能性を秘める
- ◆ 筆者が「不可触性」という教理の敏感な意味に初めて接した経験について：北インドの児童福祉センターの訪問
 - 高位カーストの既婚女性：赤子から古いキルトのはぎれでできたおくるみを取ると、赤子の身体は乾燥しきった、あるいは半乾きの排泄物で硬くおおわれていた
 - 修道女：

「赤ん坊のためにおむつを使用させようとしていますが、彼らはそれを買うことはありません。彼らは自分で赤ん坊を洗うこともないし、そのために洗い人にお金を使うこともないので。・・・この女性は立派な出自で、彼女の夫はよい教育を受けた技術者であり、高給取りです。時に彼女は、乾いて剥がれ落ちてくる汚れを払いのけるために、中庭にキルトを干すだけです。・・・これは、なぜ子供の下痢がその地域の家庭に蔓延しているかを説明しているでしょう・・・」
 - 扉の外側で乳児を抱いた、若いアウトカーストの女性
 - 修道女：

「不可触民は他の人々と同じく知性的です。彼らはもはや不潔には見えません。でもこれがインドの慣習なのです。我々はそれを改めることはできなかったのです、できる限り一步一步進み、彼女たち全てを助けようとするだけです」

■ 第12章「見よ、一筋の光を！」：pp. 164-177

- ◆ キリスト教改宗者の人口比率：500万人といわれるが、諸説あり。改宗者の第3世代には、インドの希望といってもいいような多くの経験豊かな人物がいる
- ◆ イギリス：キリスト教の伝道教会から助力を得ながらアウトカーストの権利拡大に努めてきた
- ◆ 近年見えてきた兆し
 - アウトカーストの抑圧に対する公然とした発言：雄弁さのみで、成果は殆どなし

- インドにおけるボランティア団体の誕生：散発的で微力だが、その誕生自体特筆すべき
- ◆ こうした概念はインド生まれではない
 - **Brahmo Samaj** の指導者：
 - 「全インドにおける今日の社会事業は全てイギリスの模倣である・・・」
 - **Sir Narayan Chandravarkar**：
 - 「不可触民の呪いは今日、インド全土にはびこっている。・・・イギリス政府の力によって、その問題は白日の下にさらされ、そのおかげで全インドの問題になった・・・」
- ◆ イギリスがもたらした有益な影響にあまり感謝しないガンディーですら、インドの行政機構全体について、「筆舌に尽くしがたいほど墮落している」と述べている
 - 権威あるバラモンの主張：
 - 「不可触民は人間の成長に必要である。人はその周囲に磁力を持っており、この力は乳のようなものである。つまり、不適切な接触で傷つけられるだろう。他の世界でその特権を否定されないということでは十分ではなかろうか」
 - これに対する **Gandhi** のコメント：
 - 「他の世界で彼らの特権を否定することが可能なら、怪物の擁護者は他の世界で彼らを孤立させることは十分にあり得る」
 - **Professor Rushbrook Williams**：
 - 「ガンディー氏は抑圧された階級の地位向上の必要性を国民に印象付けるために多大な労力を費やしてきた。・・・正統派ヒンドゥーは彼の計画にあえて抵抗しなかった」
 - 不可触民の擁護者は多くなったが、ガンディーの信念に追随したいと願う者はごく少数
- ◆ ボンベイで開催された、ガンディーに反対する集会（1925年1月5日）
 - **Manamohandas Ramji**（主宰者）：不可触民の問題は、伝染病患者を隔離するのと同じ地平の話である。ヒンドゥー社会を崩壊させる「異端者」をリンチしようとの発言を、ヒンドゥーがその命を、古くからの清浄を守るために犠牲にする用意ができていないと解釈
- ◆ ガンディーの発言：
 - 「・・・この問題はインド人の人間性を貶めてきた。「不可触民」は獣以下であるかのように扱われてきたのである。・・・私はインドに押し付けられたイギリスの流儀を弾劾するのと同じくらい、不可触民の問題を弾劾することに強い意志を持っている。不可触民の問題は私にとって、イギリスが定めた法より耐え難い。もしヒンドゥーが不可触民というものを固守するならば、ヒンドゥーは死に絶えるだろう・・・」
- ◆ なぜ不可触民が突如として、配慮の対象となったのか？
 - **Sir T. W. Holderness** (1920)：
 - 「・・・問題は、「抑圧された階級」がヒンドゥー教徒に含められるべきか否かということである。10年前なら否定的だっただろう。現在でも、保守派の意見は変わっていない。しかし学の高いヒンドゥー進歩派の良心は、この点により敏感になっている。ヒンドゥー人口の3分の1以上を占める人々がヒンドゥーの一部として許容されない点を、・・・対抗勢力であるイスラームの政治家に指摘されるのも妙な話である。・・・「抑圧された階級」がヒンドゥーの境界の内にいることを主張するのはきわめて当を得ている。しかし、もし彼らをヒンドゥー教徒に数え入れるならば、彼らは今よりも大きな配慮をもって扱われるべきである・・・」
- ◆ 西洋の侵入による別の所産：不可触民がそれまでの宗教的帰属を保持しなくなった
 - イスラームは、不可触民を仲間に入れる用意ができていない。キリスト教は、不可触民を招き入れるだけでなく、教育を施し援助を行う。問題は、長らく抑圧されてきた人が立ち上がるには、どのくらいの年月がかかるのかということ
- ◆ デリーで不可触民問題に関する協議（1917年秋）：不可触民の政治団体はインドの自治に反対
 - **Panchama Kalvi Abivirthi-Abimana Sanga**（マドラス管区のアウトカースト連盟）：

- 「我々は政治変化には反対する。また、バラモンから守られることだけを願う・・・」
- **Madras Adi Dravida Jana Sabha** (マドラス管区のドラヴィダ人 600 万人の代表組織) :
「・・・インドのイギリス人は我々を愛し、我々もまた彼らを愛する・・・」
 - ◆ イギリス皇太子のインド公式訪問 (1921 年) : インドにはそれまで、不可触民に配慮を示した権力者はいなかった。これまでのどの権力者よりも偉大な最高権力者の息子は、彼らにとってほぼ神に等しい。その神がありがたくも不可触民を受け入れるだけではなく、彼らの示す敬意に対して感謝の意を表してくれる。
 - ボンベイ (11 月 22 日) : 北部への出発日。駅まで半マイルの地点で、警戒線が崩れて人々が叫びながら争って皇太子が乗る車へ近づいた。「Yuvaraj Maharaj ki jai! (皇太子万歳!)」
 - カイバル峠 : 「Government ki jai! (政府万歳!)」
 - 「見よ、光だ! 光だ!」と互いに叫びあう
 - デリー門に向かう Grand Trunk Road : 「Yuvaraj Maharaj ki jai! Raja ke Bete ki jai! (皇太子万歳! 王の息子に万歳!)」不可触民の代表者が 6000 万の不可触民へ演説を依頼。皇太子は事の重大性を認識していたのか否か、また単に全世界への友好的な性格が彼に衝動的にそうさせたのか、彼は前例のないことをした。「犬以下」の彼らのために立ち上がり、優しい言葉をいくつか述べ、彼らを見渡して、まぶしい笑顔で彼らに会釈をしたのである。
 - 「兄弟一あの言葉は我々の兄弟がもたらした真実だった。見よ、あそこに本当に光がある! 彼の顔に、光、栄光、が見える!」

■ 第 13 章「公職を、さもなければ死を」: pp. 178-188

- ◆ 教育制度について
 - インドの政治家 :
「イギリスは自国ではずいぶん昔に義務教育を導入した。なぜここでそれをしないのか? それは明らかに、インドの臣民を無知にしておくほうが目的に適っているからだ」
 - **Raja of Panagal** (マドラスの反バラモン指導者) :
「イギリスがやってくるまで、バラモンは我々の教育のために何をしてくれたのか。・・・イギリス統治がはじめて、教育を全人民の権利にしてくれたのだ」
 - **Dubois** の指摘 (19 世紀初頭) :
「現代のバラモンが先祖より学があるとは信じていない。今日まで、多くの未開人が無知の闇から現れて文明の極致に達し、知的研究の幅を広げてきたというのに、ヒンドゥーというのは立ち止まったままだった。彼らの内に精神的、倫理的改善の痕跡は全く見られないし、人文科学における進歩の徴候もない・・・」
- ◆ その後 50 年間の教育運動の展開
 - **David Hare** (インドに在住したイギリス人商人) : 「ベンガル地方の地元民の教育と道徳向上」に人生を捧げた。**Raja Ram Mohan Roy** とともに活動。世俗のヒンドゥー大学設立 (1817 年)。
「英語および現地語と、ヨーロッパおよびアジアの文学と科学分野による、尊敬すべきヒンドゥーの子らへの教育」正統派ヒンドゥーの怒りを買う
 - 1818 年 : バプテスト派宣教師 **Caray, Marshman, Ward** がカルカッタ近郊に学校設立
 - 1820 年 : 英国国教会の大学開校
 - 1830 年 : **Alexander Duff** による 4 校目の大学開校。**Ram Mohan Roy** の助力。インドに西洋科学を伝える目的。
- ◆ イギリス統治初期の教育政策 : インドの方針に沿うことを主旨とした
 - **Thomas Babington** による方針転換

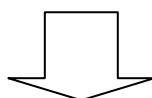
- Sir Macaulay : 名誉と人間性の名の下に、インド世界に西洋科学の光が惜しみなく注がれるべき
「我々は健全な哲学と真実の歴史を援助する。公費で医学、天文学、歴史、地理学を支援する。アラビア語とサンスクリット語の高等教育に支援することは、単に真実の根拠を損なうだけでなく、誤謬の王者を持ち上げるために助成金を支払うようなものである」
- ◆ 公教育普及の目的
 - 民衆の手に健康と豊かさと社会的進歩の鍵を与えること
 - 民衆に自国資源の発展について呼び覚ますこと
 - 民衆が富と商業の健全な増進に伴うあらゆる進歩を享受すること
- ◆ イギリス政府が東洋の教えを妨げ、現地語を排除していると解釈すべきではない
 - 現地語が近代科学の概念を伝達するに足る発展を遂げる日のために、現地語の適切な教育を全ての学校で義務化
 - インドの二大古典語のいずれかよりも英語の教育が選択されているのは、そのいずれも全く新しい言語として学ばれるものであって、東洋の二言語で書かれた本が存在しないため
- ◆ 1857年以降の30年間で5つの大学が開校：カルカッタ、ボンベイ、マドラス、ラホール、アラハバード
- ◆ 商学、農学、森林学、工学、教育学のうち、いずれもインド人の野心を満たさなかった
 - 国家主体というものが、インド人にとって未知の概念であった
 - 国家思想というものが、本来の倫理的資質の内には存在しなかった
- ◆ 英領インドにおける大学教育に関する統計（1923-24年）
 - 13大学から11,222名の卒業生。うち7,822名が人文科学の学位を取得し、2,046名は法学、446名は医学、140名が工学、546名が教育学、136名が商学、86名が農学
 - 学士課程に在籍する68,530名の所属学部の割合も同様。人文学と法学が高率で、農学、衛生学、公衆衛生、外科、産科、獣医学、科学、商学などは、援助があっても少数
- ◆ 典型的なインド人は、学問的理由ではなく公職のために人文学の学位を欲する。
 - その獲得のために、必死で勉強。その結果、酷使してきた貧弱で小柄な体躯は衰弱する
 - 酷使の結果として起こる、突然の精神的なうつ状態や破綻、つまり「衰え」
 - 学位に対する見返りが芳しくない場合、家族全体の失望は痛切
 - 若者の選択肢の少なさは、彼自身と母なるインドの精神的な光に多くを負っている。有用性の機会豊かな国土は、彼の頭脳と手の奉仕を嘆願しているというのに、伝統と「誇り」がその呼び声に対して彼を盲目にし、聾にし、無感覚にしている
 - 近年の大学卒業生は高位カーストとは限らないが、だからこそその慣習を受容したいと願う。教育が与える最大の賞は izzat (名声) の増大を約束すること。公職の獲得に失敗した者は皆、他のことに力を向けることを拒絶、居候の身となる
 - Lord Macaulay : 90年以上前のインドにおいて、サンスクリットを治めた者の団体の嘆願に同様の現象を看取していた
- ◆ インド人政治家や知識人による批判
 - 毎年輩出される大学卒業生に対して職を供給すべきであるとの主張：
「・・・政府は大学の存続に責任がある。我々を教育するために授業料を受け取って・・・我々が欲している唯一のものを与えないとは、どういうことか。・・・自分たちと仲間のために、公職を確保しようではないか」

■ 第14章「我々は互いによくやった」: pp. 189-198

- ◆ インド主要7州で、初等課程の義務教育法施行（1918-20年）
 - 将来の民主政治において識字能力のある有権者が必要となる、との政治的判断
 - 基本的には任意のものにすぎず、ほぼ無効に等しかった
 - 原因は、可決の経緯が「改革（行政機構の「インド化」に伴う「両頭政治」の誕生）」と軌を一にしており、教育が地方大臣らの手に「移譲された課題」として受け渡されたため
 - ◆ 義務教育は無償であるべきだが、無料で全ての子供たちを世話するに足る学校を建て、教員を雇用するには、徴税による豊富な財源を要する
 - ◆ 英領インドの初等教育に関するデータ
 - 小学校数 168,013 校。対象年齢の児童 3,650 万人のうち、実際に学ぶ児童数は 700 万人
 - ◆ フィリピンにおけるアメリカの教育普及活動との比較
 - フィリピン：87 の方言、共通語がない。現地文字がない。現代文学がない。社会的障害はない。現地人教師の質が高く、意志が強い。裕福なフィリピン人が地域の学校を維持するために莫大な寄付を行っている
 - インド：220 の現地語が話され、共通語がない。50 もの筆記体系（いずれも 200~500 字）。現代文学がない。学のある者は農村部で奉仕したがないため教師不足。男子教育に対する民衆の態度は無関心で、女子教育に至ってはほぼ敵対感情すら抱いている
 - ◆ イギリス統治における教育政策の失敗
 - フィリピン諸島の教育に関する **Monroe Survey Board** の報告から多くを参照したため
 - インドの教育を現地の方針で発展させることを構想したが、すぐに放棄。インド人の利己的な精神構造を計算に入れずに、すでに教養をもつ人々を前面に押し出すことによって、精神教育が「浸透」の進行を誘発しようと信じていた
 - ◆ フィリピン、インド双方の学校や大学において、西洋的な政治史・社会史の文言がアジアの精神に注ぎ込まれ続けている。アジア的な記憶というものが文言を得て、外来の伝統から外来の意味を与えられており、いずれの場合も結果は同じ
 - ガンディー：
「我々が受けた全ての教えは我々を事務職員か弁士にした」
「一般に、教育の意味とは文字の知識である。男子に読み書き計算を教えることを初等教育と呼ぶ。農民は働いてパンを得る。つまり世界の一般的な知識を持っている。・・・彼は道徳性の規則を理解している。しかし彼は自分の名前が書けない。彼に文字の知識を与えてどうするのか。彼の幸せを 1 インチ拡充するということか。・・・この教育を義務化する必要はない。我々の古くからの教育制度で十分だ・・・」
 - **Lala Lajpat Rai**（Swarajist の指導者）：
「インドには今も昔も、隠遁的で孤立した、自制的な生活について説く、すぐれた人々がいる。彼らは古きよき時代を切望し、後戻りしたいと願う。・・・私は国民に対して、彼らに気をつけると、真剣に警告しなければならない。この国は思想・生活の面において、最も近代的な国のレベルに高められなければならない。」
 - ◆ 識字能力という点だけを見ても、英領インド人口の 92%、2,220,000,00 もの農村部の人々を、「最も近代的な国家のレベルに」導く責務は、誰に課せられているのか
-

■ 第15章「なぜ光は与えられないのか」：pp. 199-210

- ◆ インドの文盲が貧困のためというのは、卵が先か鶏が先かという論争と同種のもの
 - Lala Lajpat Rai (Swaraj 運動指導者) :
「総督府は民衆に対する読み書き算数の初等教育すら拒んできた」
 - Mahomed Ali Jinnar :
「なぜ光は与えられないのか」
- ◆ 文盲の原因はインドの貧困のせい、イギリス政府の故意か、あるいは別のところにあるのか
 - 英領インドの 257,000,000 の人口のうち、半数が女性。インドの人々は断固として女性教育に反対してきた。イギリス政府、少数派のインド人、キリスト教団体が協力して行ってきた努力は、女性人口の2%弱に識字能力を与えることに成功。英領インドの文盲の女性は1億2千100万人ということになる
 - 英領インドの人口のうち、60,000,000 人が「不可触民」。この集団への教育に対し、ヒンドゥーの大多数は強固に反対してきた。その全人口から半数を占める女性を差し引くと（先の計算に含めているため）不可触民男性の5%が識字能力を有する。そうすると、28,500,000 人が多数派の意志によって文盲であるということになる
 - 英領インドの総人口のうち 90%が農村部に分布。農村が無知のままである限り、全インドの識字率は向上しない



(つまり・・・)

英領インドの総人口		247,000,000
英領インドにおける文盲女性の人口	121,000,000	149,500,000 (人口に占める割合：60.53%)
文盲の不可触民男性の人口	28,500,000	* 正統派ヒンドゥーによって文盲にされている人口の割合と読む

- ◆ 農村部の教育には、大勢の教員が必要
- ◆ 女性教員の存在に関する問題：なぜインド人女性がインド人児童を教育できないのか
 - 子持ちの年齢にあるインド人女性は、特別な保護なしに思い切った行動に出られない。立法府で重要問題として扱われたこともない。インド人にとっては当然の事柄のひとつ
 - 強硬派の民族主義者 :
「女性に対する我々の態度というのは、女性が人格をもつことや、適齢期の女性が家族の保護を離れることを許容しない。農村へ赴こうなどと思い切ったことをする者は、たいていの場合はキリスト教徒だが、男性のしつこい要求に服従するまで、あるいはそうしない限り、困難な人生を歩むことになる。・・・我々インド人は自由で頼もしい女性の可能性などというものを信用していない。それは自然の摂理に反する。・・・」
 - カルカッタ大学評議委員 :
「ベンガル人男性が zenana に住まない女性に対して尊敬と礼儀を学ぶまでは、女性教師などといった職業はありえない」
 - Mason Olcott :
「夫に付き添われない限り、農村部で女性が教師になることは現実的にありえない」
 - インドの事情に精通した人によると :

「その職業は慎み深い女性によって従事されえないもの、との感情がある。・・・女性の人生の目標は婚礼である・・・もし彼女が家事の義務を無視していれば、彼女はふしだらである」

- ◆ 寡婦の社会的自立と女性教員雇用の関連
 - インドに 2,680,000 人いる寡婦を、みじめな隠遁生活から幸福な建設的職業に呼び込む。しかし、不運と悪魔の目が寡婦の生得権であるという宗教的信念のために、若い寡婦の教師は未婚女性と同様に農村で、根も葉もない悪評などと対峙することになる
- ◆ 1922年時点で、英領インドの 123,500,000 人の女性人口のうち、4,391 人が教員訓練校で学んでおり、うち 2,050 人はキリスト教コミュニティー（インド全人口の 1.5%）出身
- ◆ 村落民自身はどうであるのか
 - 学校にほとんど関心がない。息子が牛の世話や雑用など、働き手として有効なら、息子を教室から引きずりだす。それが農村部の学校の欠席率を生み出している要因
 - ryot（小作農）は児童労働とその稼ぎの助けなしに家族を養えないほど貧困である。病気もまた、登校を妨げる大きな要因のひとつ
 - インドの農民は改革というものに懐疑的
 - イギリス人行政官の多数派意見：
「学校のカリキュラムはあまり実践的ではない。小作農に彼の息子がよい学校教育を受けたのち、彼の土地にとってより価値をもつと示すことができれば、彼は息子を学校に入れる意味を少しでも理解するだろうに」
 - Mr. Kanakarayan T. Paul の委員会報告：
「・・・父親は息子に農業を学んでほしいとは思っていない。なぜなら彼は教師より自分のほうが多くを知っていると考えているからである。しかしより大きな理由として、父親が息子に教師か公務員になってほしいとの野心を持っていることがある。こうした向上が不確実だとわかると、教育熱は途端に冷めてしまうのである。教育の精神的価値という点において、彼は無知なのである。・・・この初期段階においては、学校の有益性や出席時間に影響するのは、カリキュラムの変化ではなく、教職員の能力と技術である。」

■ 第 16 章「実現不可能な理想」：pp. 211-217

- ◆ 尊敬を集める高位ヒンドゥーの「故郷」への態度：
 - 「病気、不潔、無知が我が国の特色である。私の一族が昔から総領を務めてきた故郷の村を 17 年前に出たとき、1,800 人程度の住民を抱えていた。数週間前に初めて帰郷してみると、人口が 600 人以下に減少していた。学校では 5、6 歳の男子が 70~80 名ほどいたので、なぜそんな小さな子供に難しい学問を教えるのか尋ねると、教師は「彼らは適切な養育、食物、マラリア予防の欠如などからくる発育障害なのです」と答えた。疑問は、この 100 年間イギリス人が何をして、我が村がこんなふうになってしまったのか？ ということである」
 - 彼が現在住む都市から電車で 4 時間足らずにもかかわらず、村に対する助力、忠言、指導、さらには友愛的なまなざしすらなしに、17 年間不在にしていた。帰郷してその崩壊ぶりを見たとき、彼は誰でもない政府を非難した
 - 彼はまた、故郷における現在の人口減少が、近郊に建設された大規模な工業用プラントでの雇用機会を得るために、住民の多くが村を離れたためであることには言及しなかった
- ◆ 別の好例：Sirdar Mohammed Nawaz Khan（パンジャーブ北部 Attock 地方の、26 村落の総領）
 - ラホールの大学を出たあと、イギリスのサンドハーストにある英国陸軍士官学校に入学。イギリスの別荘に度々招かれるうち、彼は英国の大地主の借地人に対する態度に感化される。
 - 18 ヶ月の奉仕期間を終えると退職して故郷へ帰還。村から村へ馬を駆り、新たな農法の実践、

衛生環境の整備、人々の地位向上のための活動

- 公共事業を急速にインド化する政府の新方針に強固に反対
- もし臣民の幸福が政府の目的なら、彼のような人物が増加することは、インド人の手に責任をより急速に移譲するための、最も強固な論拠となるだろう

◆ 教育に対するインド人の態度

➤ Olcott :

「上位階級の者は、村民に対する教育に無関心だけでなく、積極的にそれに反対している。なぜなら無条件の服従と長年供されてきた低カーストの奉仕が妨げられかねないからである」

➤ Commission of Inquiry :

「富める地主も裕福な農民も、小作農に対する教育に無関心である」

◆ 農村の人々は、尊厳を与えられ、興味深く協力的な人々である。彼らは愛情と配慮をもち、この 60 年間享受してきた政策に対する価値を十分にもつ人々である。彼らとの積極的で知的な連携なしには、寡頭制よりすぐれたいかなる地元政府もインドで存在しえない

◆ 今日、インドの村人はイギリス人のみが堅実で親愛的かつ実際的な関心で接してくれ、かつ多くの必要物について堅実で信頼できる助力を寄せてくれるものとみなしている

◆ ガンディーとのやりとり

➤ 筆者 :

「もし政治的優位や社会的地位、また単に人から注目されるための闘争に代わって、学のある輝けるインドの若者が、自身を目立たぬようにし、農村へ赴き、彼らの生涯を人々に捧げるなら、彼らはインドのために奉仕したことにはならないでしょうか」

➤ ガンディー :

「ええ、そのとおりです。しかしそれは実現不可能な理想です。」

◆ カルカッタで活動する 4 人の若手政治指導者とのやりとり

➤ 筆者 :

「あなたは自分の個人的・政治的野心を愛すべき母なるインドに捧げることによって、多くの英国人が男女問わず現在しているように、農村で人々のために働くことによって、あなたやその他多くの仲間が故国に奉仕しようとは思いませんか・・・」

➤ そのうちの 1 人 :

「おそらくそうですが、講演もまた仕事です・・・外国人をインドから追い出すまでそれ以外に何もできません」

◆ 長年インドに住み、深く同情的にインド人に関心を示すアメリカ人ビジネスマン :

「もしこの国を運営できたら、全ての大学を明日閉校するだろう。彼らが食物を栽培することを教育されるまでに、公務員や法律家や政治家になることを教えるのは罪だ」

◆ ある大きな大学のアメリカ人教育者 :

「インドでの 20 数年にわたる経験ののち、私はここでの制度全体が誤りであると分かりました。人々には中等教育に進む前に、2 世代にわたる初等教育の基盤が必要であり、高校を創設する前に 2 世代にわたる中等教育の基盤が必要なのです。そして、7~8 世代にわたる教育的基盤なしには、いかなる大学も開校するべきではなかったのです」